

ウシ—日本人と牛乳—

Bos taurus

文・写真 早川 篤(大阪市天王寺動物園 飼育係・学芸員)

人類は1万3千年前から、狩猟で捕えた野生動物を食べずに飼育し、子を産ませ持続的な生産を可能とする牧畜をはじめ、より飼育しやすく改良し家畜を作り出した。さらには子に与える乳を人間が横取りすることで、肉以外の新たな食料資源を発見した。

『魏志倭人伝』(3世紀)に「その地には牛、馬、虎、豹、羊、鵠なし」とあり、日本では家畜としてのウシはそれ以降に朝鮮半島からやって来た。

5世紀後半の船宮古墳(兵庫県朝来郡)から、国内最古とされる鼻輪の一部が残る牛形埴輪が出土しているが、文献では飛鳥時代の医薬書に牛乳の薬効や乳牛飼育法の記述がある。また、『日本書紀』安閑2(535)年9月条に「牛を難破大隅嶋と媛島の松原とに放って」とある。当時の大阪は東淀川区辺りが淀川の河口で、下流域にかけて無数の島々が点在し「難波八十島」と呼ばれていた。今は陸地となったが、大阪市内には「難波八十島」の名残として柴島、都島、福島、姫島など「島」が付く地名が多く残る。現在、ウシが放たれた大隅嶋にあったといわれる大隅神社の近くに「乳牛牧跡」の碑がある。乳牛牧は平安時代に朝廷の薬などを司る典薬寮という役所の領地で、乳牛を放牧し牛乳などの乳製品を朝廷に納めていた。腐敗しやすい牛乳は加工して納められた。加工品として、『延喜式』には牛乳を10分の1になるまで煮詰めた「蘇」

を税として納めることが記され、江戸時代の『和漢三才図会』には「酪、蘇、醍醐、乳腐」の記載がある。「醍醐」は『大般涅槃経』に「乳から酪→生酥→熟酥→醍醐の順に精製し、醍醐

が最上で服せば病を除く」とあるが、醍醐味という言葉が残るのみで、いかなるものかはわかっていない。おそらくは、バター、バターオイル、ヨーグルト、チーズやキャラメルのようなものであろう。ちなみに、孝徳天皇(在位645~654年)が大変喜んで飲んだというのが、日本人が牛乳を飲んだ最初の記録である。平安末期までは朝廷の滋養薬として利用されていたが、牛乳や乳製品の記録は、その後600年ほど途絶える。

徳川吉宗が享保13(1728)年にインド産のコブウシを3頭輸入し、嶺岡牧(千葉県南房総市)で乳牛飼育が再開された。幕府の管理下で「白牛酪」という乳製品や「御生薬」という傷薬を製造し、庶民にも販売した。大政奉還後、その技術とウシは新政府に継承され、開国後には牛乳の利用が本格化していく。とはいえ、明治11(1878)年に日本を訪れたイザベラ・バードが、米沢で荷物運搬に借りた牝ウシが子連れであったので「新鮮な牛乳が飲める」と喜ぶのを見て、誰もが胸が悪くなったという。明治天皇や皇族が毎日飲用していると宣伝された牛乳だが、「牛乳を飲むと額に角が生える」と庶民にはまだまだ奇異な食品であったようだ。よくよく考えると、本来は同種の子どものしか飲まない乳を、他種のしかも成人が飲むというなんとも不思議なことを私たちは行っているのだ。



牛形埴輪(高槻市今城塚歴史館にて撮影)
ウシの埴輪はウマなどに比べてごく少数しか出土していない



乳牛牧(味原牧)跡の碑(東淀川区大桐5丁目)
大桐中学校の塀外にあり、近くには大隅神社がある。
1500年前には大阪湾に浮かぶ島であった。